

教科・領域等 〔国語科〕

9 対話的な学びを視点とした授業改善の実践

**こんな実践**

子供たちが自分の文章や友の文章のよいところを見付けながら、文章を書くことに自信をもって取り組んでいる姿に出会いたいと思うことはありませんか。既習事項から交流の観点を明確にして、複数回友と読み合うことをかさねたことで、書いた文章のよさに気付いていった実践です。

実践学校 I 小学校

実践学年 2 学年

実践時期 5 月下旬

単元名 「かんさつ名人になろう」

学習指導要領との関連：〔知識及び技能〕(1)オ(2)ア〔思考力、判断力、表現力等〕B 書くこと(1)ア、イ、オ

A先生は、前単元の子供の育ちから系統的に「書くこと」の力が付くことを願い、本単元を構想しました。

第一次では子供の興味関心を引き出すために、「自分たちで育てた二十日大根を、詳しく観察し記録文を書く」という生活と関わりのある課題設定にしました。第二次では作例の提示やペアでの対話など、意図された教師の支援の場面と、子供が考える場面を組み立てました。第三次では互いの文章のよいところを見付けて伝え合う時間や、単元の学びを振り返り、次単元への意欲が喚起される時間を設けました。

本時、Mさんは、自分の書いた記録文を見返します。大事に育て、観察して書いたわたしの二十日大根の記録文を、友だちに読んでもらいたい、友だちの記録文も知りたいというMさんの



意欲が高まっていきます。意欲の高まりを捉えたA先生は、交流して文章のよさに気づくための観点を、既習事項からむすびつけ、フラッシュカードで提示します。学習の方向性が明示されたことで、思いを書いて表現することに困難さをもっているMさんも安心して活動に取り組みました。

A先生は、ペアを複数回変え記録文を読み合う交流を子供たちに提案します。子供が様々な友だちの考えを知り、考えを広げていくことができるようにするためです。交流が始まると、Mさんは、友だちの書いた記録文を読み、文章のよいところを探していきます。以下、その様子です。

Mさんの4人との交流 ～様子と記述から～

1人目への記述

○色(観点)：よく気がついたね ○つかってみよう課(観点)：よくみたね

「いっぱい使ってみよう言葉があったよ」と交換しました。また、返却された自分の記録文に書かれた友だちの評価を見て、手を挙げて喜びました。

2人目への記述

○大きさ：こまかいところもよくみたね

2人目の友だちから返却された記録文には、「手触り(に着目して)さわってみるとふわふわなのがよくわかるよ」「におい(に着目して)わたしも最初は、草のにおいがしたよ」と具体的に評価の内容が書かれていました。

3人目への記述

○つかってみよう課：よくみつけたね

Mさんは、3人目の交流からじっくり考えて書くようになっていきました。2人目の友だちからの意見を参考に、一言で終わらせるのではなく、さまざまな着目点から具体的に考えを書こうとしていました。

4人目への記述 ○かんさつ：いちばんちっちゃくてもよくみたね

○におい：やさいのにおい・・・ (終了時間)

Mさんは、4人目の交流もじっくり考えました。時々黒板に目をやり観点を見つめながら時間いっぱい考えていました。4人目への記述は、よいところが具体的になっていきました。そして、「いっぱい書いたから、たくさん読んでね」と友だちに返却しました。一人目の交流時に比べ、書いてある内容や発した言葉も変容していました。

このようにMさんは、黒板に掲示された交流の観点を基に、交流した4人の着目点と具体的に書かれていた評価の仕方を、自分の着目点と評価の仕方に取り入れていきました。Mさんの「よいところを見付ける力」の質が高まったと考えられます。相手の文章のよいところを見付けることが、自分の文章のよいところを見付けるということにもなります。本単元で書くことに自信をもったMさんは、次単元で友だちに地元の「おみこし」について伝えようと意欲的に文章を書いていきました。



ここがポイント

- ・対話的な学びを深めるためには、交流の観点を明確にし、例えばペアを複数回変えるなど、友だちのさまざまな考えを知り、考えを広げていくことができるようにする支援が大切です。

まとめ

- ・Mさんの文章のよいところが具体的に書かれていった様子や、「いっぱい書いたから、たくさん読んでね」と主体を自分にした友だちへの言葉は、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けるという資質・能力につながり、書くことへの自信になっていくと思われます。